

## 46. 新型コロナウイルス感染症下における認可保育園の現状（第2報）

楠 幸博、岡田 靖、小笠原由法

### 【はじめに】

新型コロナウイルス感染症は日本において2020年2月から流行が始まった。同年9月のアンケート調査では、保育園での発生施設は2%に止まっていた。2021年になり変異株（アルファ株、デルタ株）が出現し、園での流行が多数報告されるようになった。3密が避けられない保育現場で、2021年9月末までの職員ワクチン接種率および園での感染拡大状況についてアンケート調査した。

### 【方法】

2021年10月認可保育園（認定こども園を含む）管理者宛にアンケート用紙を郵送し、FAXにて回収した。

### 【結果】

依頼した369施設のうち219施設から回答を得た（回収率59%）。合計園児数は21322人（平均97人/施設）で、合計職員数は6208人（平均28人/施設）であった。新型コロナウイルスワクチンを接種した職員数は5581人（接種率90%）で、コロナワクチンの副反応で休職した職員数は2292人（全職員の48%）に上った。次に新型コロナウイルスに感染した園児および職員数を調査した。感染した園児が出た施設数は105（全施設の48%）で、感染した園児数は272人（全園児の1.3%）で、入院し

た園児数は6人（園児感染者の2%）で、園児の入院日数は6~20日（平均10.5日）であった。感染した職員が出た施設数は67（全施設の29%）で、感染した職員数は130人（全職員の2.1%）で、入院した職員数は16人（職員感染者の12%）で、職員の入院日数は1~20日（平均7.8日）であった。次に1施設あたりのコロナ感染者の発生数を調査した。発端者のみの施設が最も多く50%に上った（図1）。多数の患者が発生したクラスターは稀であった。次に新型コロナウイルス感染患者が発生することによりいつ休園となったかを調査した（図2）。110施設（全体の51%）が休園を経験し、2021年8月が最多であった。平均休園日数は5.4日であった。

感染経路について札幌市医師会HP（保健所）に詳細な報告（保育園および幼稚園における陽性者発生状況）があったので、2021年8月から10月までの報告をまとめた（125施設、陽性者301人）。丁度デルタ株が流行した時期にあたる。初発の保育園および幼稚園児は70人で、その感染経路は家族から41人、習い事で1人、友人から1人、デイサービスで1人、不明26人であった。初発の職員は保育士50人、調理師8人、職員2人（全員有症状）で、その感染経路は家族から3人、会食で5人、友人から13人、別職場で1人、不明28人であった。拡散数について、一人発生が57施設、2人26

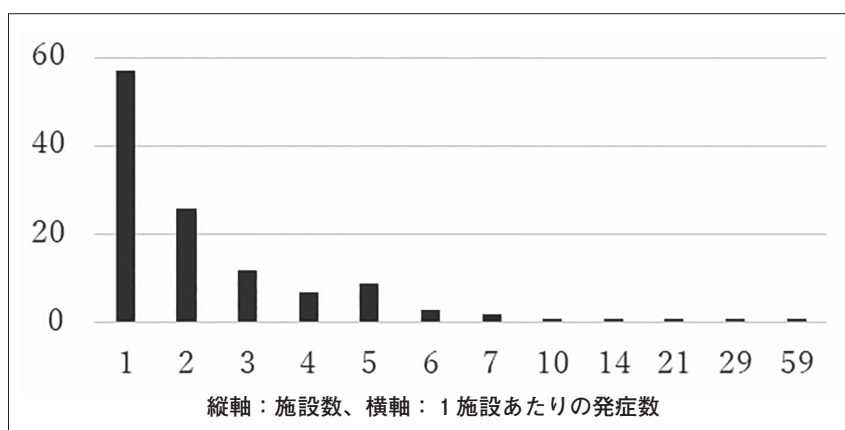


図1 1施設あたりのコロナ感染者発生数の分布

施設、3人12施設、4人7施設、5人9施設、6人3施設、7人2施設、10人以上5施設であった。

**【考察】**

今回の結果はデルタ株までの保育園で発生した新型コロナウイルス感染症の集計である。保育園において職員は全員マスクをして、90%がワクチンを終了していた。園児はワクチンをしておらず、マスクもできず、密を避けることができない状態であった。約半分の保育園がコロナ感染症を経験したが、拡大規模は小さく、クラスターは稀だった。この結果から、これまでの保育園での対応は十分だったと考えられる。しかし2022年1月からはじまったオミクロン株の流行はこれまでと違って大きく、低年齢（保育園から小学校までの10歳未満）に広がっている。園児から保護者や同居家族、他の園児へ感染など、これまであまり報告がなかった経路で多くなっている。保育園児は発熱することが多い年齢であり、臨床経過や診察では鑑別困難である。家庭において迅速抗原検査キットを用意しておき、発熱した際に随時検査を行うことは発熱外来への負荷を軽減できる対策の一つと考える。

**【まとめ】**

2021年9月末までの保育園の現状をアンケート

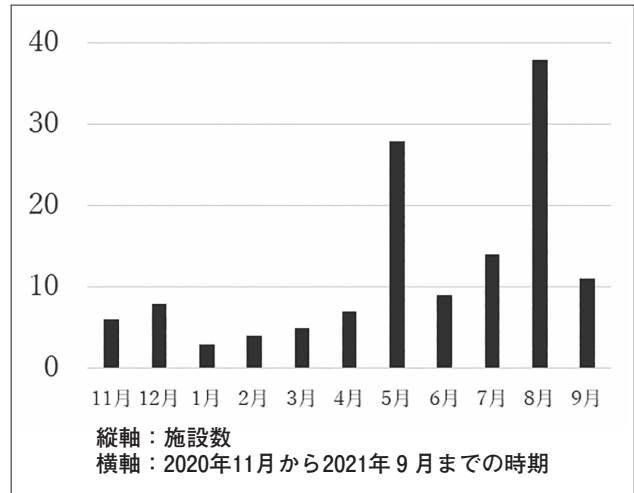


図2 コロナ感染発症による休園となった時期

調査した。職員のワクチン接種率は90%に達した。全施設の約50%が感染を経験し、休園した。感染した園児は全体の1%、職員は2%であった。入院者は感染園児の2%、職員の12%で職員の方が重症化した。1施設あたりの発症者数から2次感染を起こしたのは約50%あったが、大型クラスターはごく少数だった。園児の感染経路は主に家庭からで、ほとんどが有症状であった。職員は感染経路不明が最も多く、判明分では友人が多かった。保育現場は密であったが、感染の拡大は限定的であった。